

第6章 踏切保安係の刑事裁判の傍聴記録

この章では、私が竹ノ塚踏切死傷惨事の事故当事者として起訴された踏切保安係の刑事裁判の公判を傍聴した記録をまとめました。

この事件の公判では、初公判から判決公判まで毎回、先着順による傍聴券交付が行われました。抽選でなく先着順だったのが幸いし、私は毎回人一倍早く出かけることで、すべての公判を傍聴することができました。

その中で、私が傍聴していて特に看過できないと感じたことを、以下に記しておきます。

「赤ボタンを使わないと車の渋滞が広がってパニックになる」は迷信か？

2005年10月7日に開かれた第4回公判で、東武鉄道本社を代表して池田直人・前運転課長が、弁護側証人として出廷しました。

このとき検察側は、その前回の公判で同僚の平賀踏切保安係が「先輩から自分が着任する前の出来事として『赤ボタンをまったく使わないテストをしてみたら、車の渋滞の列が2～3キロ先までつながって一帯がパニック状態になった』という体験談を聞かされて、それで自分もパニックを防ぐには赤ボタンを使わなければならないと考えた」と証言していたことに触れ、本社にはそういう話は伝わっていなかったのかと質問しました。

これに対して、池田証人は「今回の事故が起きてから赤ボタンの使用を禁止し、そのうえで渋滞状況の調査もしましたが、渋滞がそれほどにまで延びたことはありませんでした。平賀証言は迷信です」と反論していました。

しかし、池田氏が「平賀証言は迷信」と決めつけたことには、重大な誤りがあります。

平賀証言に出てきたパニック云々の話は、平賀証人が竹ノ塚の踏切に配置される前の、昭和40年代の出来事として語られています。この時代には、栗六陸橋をはじめとする、第37号踏切を避けるための道路は、まだほとんど整備されていませんでした（第1章「伊勢崎線第37号踏切を迂回するための周辺道路等の整備経過」を参照）。

これに対して、池田氏が「今回の事故が起きてから...渋滞がそれほどにまで延びたことはありません」と証言しているのは、第37号踏切を避けるための迂回路が複数整備されている今日の話です。

つまり、池田氏は、今日では自動車交通量が昭和40年代ほどには第37号踏切に集中していないという事実を無視して「平賀証言は迷信だ」と決めつけていることとなります。

2つの物事を科学的に比較するうえで大前提としなければならないのは、比較する要素（この場合は渋滞の長さ）以外の条件（道路網など）を統一することです。

今日では昭和40年代と比べて、自動車交通の絶対量が増えているのは事実です。しかし、そのことを考慮しても、池田氏の迷信云々の証言については、科学的合理性を欠いた、東武鉄道（の上層部）が責任を逃れるための言い訳であると指摘せざるを得ません。

「赤ボタン」を使うことを前提として服務姿勢の悪さを責めるのは筋違いでは？

2005年10月31日に開かれた第5回公判では、被告人質問が行われました。

このとき検察側は、被告の踏切保安係が、遮断機を上げるとき指差呼称（しさこしょう、列車の通過や連動盤の表示などの状況を指差し声を出して確認すること。「確認喚呼」（かくにんかんこ）とも言います）を日常的に怠っていて、間一髪で事故を免れヒヤットした経験が何度もあったという話になったとき、

「それだけヒヤットした経験があれば、何が大事かは自ずとわかるよね。赤ボタンを使わなければならない前提でも、しなければならないことが。何だと思う？」

「仮に赤ボタンを使うのがしかたなかったとしても、指差呼称さえきちんとしていれば、事故は防げたんじゃないの？」

などと、被告に詰問していました。

指差呼称は、鉄道の現場では安全確認の基本中の基本です。被告の踏切保安係が、この基本中の基本をおろそかにしていたことについては、責任を免れることはできないと、私も思います。

ただ、私がそれ以上に引っかけたのは、検察側が、上に引用したような「赤ボタン」を常用することを前提として「服務姿勢がなっていない」と被告を責めるのは、筋違いではないか？ということです。

「赤ボタン」とは、序章の解説の2章(2)で「解除ボタン」と記したものの一部です。

「赤ボタン」を使うということは、人為ミス対策の安全装置を殺した状態で遮断機操作を行うことを意味しています。こういう状態を前提として被告の責任を追及するのは、序章でも記したとおり、

「ミスを防がなかったほうよりも、ミスをしたほうが悪い」

という東武鉄道の見解と根を1つにするものです。こういう考え方は、人間にはミスが付きものという、わかりきったことを無視している点で、きわめて問題があるのではないのでしょうか。

東武鉄道だけでなく検察までが、こうしたスタンスで被告の責任を追及したことに合理性があったと言えるのかどうか、私には今なお疑問に思われてなりません。